

梁特治『宋代禅宗の中期高麗禅への思想的影響』(学位請求論文) 審査報告

審査日 2019年6月28日

審査員 中島志郎(花園大学・主査) 野口善敬(国際禅学研究所)
安藤嘉則(駒沢女子大学)

総評要旨

梁特治『宋代禅宗の中期高麗禅への思想的影響』は、第一部 宋代(960~1279)看話禅と黙照禅の展開、第二部 宋代禅宗の中期高麗禅宗(1170-1270)への思想的影響、という本論と「朝鮮半島に於ける『臨濟録』の刊行と展開」という附論からなる。

第一部では、中国宋代の隆盛期の禅宗、とりわけその中心人物である大慧宗杲(1089~1163)と宏智正覚(1091~1157)のいわゆる看話禅と黙照禅の性格の相違を展開の軸として、禅宗の思想的骨格を定礎し、禅宗の思想的骨格を定礎するという意味で、大慧の「黙照禅批判」の剔抉が中心課題となるというのが本研究の主題となる。大慧宗杲(1089~1163)と宏智正覚(1091~1157)の思想的対比という従来説に対して真歇清了『信心銘拈古』をあらためて問題として、大慧の「黙照禅批判」の真相解明を課題とした。そこで俎上に載せられたのが、真歇の『拈古』末尾の無外義遠(?~1266)の跋文であり、新たに新出資料である祇陀大智(1290~1366)撰『真歇和尚拈古抄』を取りあげ、黙照禅批判とその反論という構図を提案している。

第二部は、宋代禅宗の中期高麗禅宗(1170-1270)への思想的影響という総題で、序論、第一章 高麗中期(1170-1270)の禅宗、第二章 知訥の禅思想—三玄門の分析—、第三章 知訥の著作に見る華嚴教学と看話禅の影響、第四章 13世紀高麗禅文献に見る宋代禅宗の影響、結論の各章からなる。時代的に高麗における禅宗の展開を中国禅宗との思想的影響関係において捉えようとした。

高麗中期禅宗の中心人物は知訥といえるが、当時の禅宗と教学仏教の関係という、時代状況の考察に始まって、華嚴教学と禅宗思想の内的な関連や、宋代の看話禅の受容の過程などを知訥の禅思想を軸に忠実に追跡している。知訥以降の高麗禅宗の研究では、後継者と云える修禅社の運動、その後の普覚国尊—然禅師など、宋朝の禅宗の動向を敏感に反映し推移する経過を追跡した。ただ知訥の綿密な分析に比して、研究分量的にも見劣りがするのは否めない。高麗時代の全体を俯瞰して論じるには、問題が多岐に及ぶため、研究には相当の困難が予想されたが、知訥以降の高麗禅の考察は、その危惧が払拭できずに課題を残した部分と云える。本研究の問題領域は広範囲に及び、研究範囲の絞り込みと問題設定の簡明な提示の必要性が指摘された。また資料の読解、特に漢文訓読については誤読の指摘と異論の提起も少なからずあった。この点はあらためて、最終的な一層の推敲は必要であることを確認した。

中国宋代、高麗の広範囲な先行研究の検討に大きな労力を割かざるを得なかったと云う点では些か恨みを残すが、宋朝公案禅の歴史的展開が高麗禅のうちに及んだその顛末を見

届けるという課題意識は一貫しており、今後の研究のためにも大きな礎となったと云える。

総じて中国宋代、高麗という大きな課題設定の下で、果敢に挑戦した学的態度は評価してよいし、本研究を通して蓄積された膨大な知識と、学識の研鑽を大きな財産として、将来に一層の飛躍を期するとして本研究を諒承することで審査の一致を見た。